

はじめに

中川 吉晴

(立命館大学、教育臨床プロジェクト代表)

松田 佳子

(立命館大学非常勤講師、臨床心理士)

ヒューマン・サービス・リサーチの本号では、教育臨床プロジェクトの主要テーマである「対人援助の実践と研究におけるホリスティック・アプローチ」について、ひとつの特集を組むことにする。本号のテーマは「インテグラル・アプローチ——統合的で変容的な探究 (Integral Transformative Inquiry)」である。これは、人間を多次元的な全体的存在としてとらえ、さまざまな次元（身体的次元、生命的次元、感情の次元、精神的次元、スピリチュアルな次元など）の発達と統合をめざす探究であり、教育や心理療法のモデルとなるだけでなく、福祉や看護においても重要な理念となりうるものである。対人援助の基礎となるのは、こうした統合的（インテグラル）でホリスティックな人間観であり、また、その実践は、トランスフォーマティブなもの、すなわち、癒しや治療、解放や覚醒などをふくみ、人間をより統合的で全体的な存在へむけて「変容」をうながすものでなくてはならない。

とくに本誌で紹介されるのは「インテグラル・トランスフォーマティブ・プラクティス」(Integral Transformative Practice, ITP) と呼ばれる実践的試みであるが、そのなかでも「ホリスティック・インテグレーション」(Holistic Integration) というプラクティスが中心にとりあげられる。このプラクティスは、スペインのラモン・アルバレダとマリナ・ロメロによって考案されたものであり、近年では、同じくスペイン人のホルヘ・フェレールによって、教育や研究などの、より広範な文脈のなかで展開されている。本誌では、このフェレールの議論と実践を中心に見ていくことにする。

フェレールは、スペイン、バルセロナ出身で、サンフランシスコにあるカリフォルニア統合学研究所 (CIIS) で学んだ後、現在は同じCIISの東西心理学部主任教授であり、トランスパーソナル心理学とその研究法、スピリチュ

アリティ、インテグラル教育などの分野で、若手の代表的研究者として高く評価されている。とくにフェレールのアプローチを特徴づけるのは、身体をつうじた探究や、参与的なアプローチである。彼の著書には、トランスパーソナル心理学の新機軸を打ちだした『トランスパーソナル理論再考』(*Revisioning Transpersonal Theory*, SUNY, 2002) や、最近では参与的スピリチュアリティの視点から宗教を論じた共編著『参与的転回』(*Participatory Turn*, SUNY, 2008) などがある。

幸いなことに、フェレール教授は、2009年6月、立命館大学大学院応用人間科学研究科の客員教授として初来日をし、当研究科で応用人間科学特論という科目を担当した。そのさい、インテグラル・トランスフォーマティブ・プラクティス（およびホリスティック・インテグレーション）の主要部分をなす「相互的身体瞑想」(Interactive Embodied Meditation) が実際にクラスのなかでおこなわれた。本誌は、このときの講義に触発されて企画されたものである。

以下、本誌でもしばしば登場するキーワードのいくつかについて簡単な説明をしておきたい。それらは、いずれもインテグラル・アプローチを特徴づける重要な概念群である。なお、詳しくは第1章、フェレール著「インテグラル・トランスフォーマティブ・プラクティス」をお読みいただきたい。

インテグラル (integral)

「インテグラル」(統合的) は、「ホリスティック」と基本的に重なりあう概念である。この「インテグラル」という言葉は、もともと近代インドの思想家シュリ・オーロビンドがみずからの思想を特徴づけるために用いたもので、オーロビンドは、その実践として「インテグラル・ヨーガ」を提唱していた。オーロビンドの弟子にあたるハリダス・チョードリイは、サンフランシスコに、カリフォルニア・アジア研究所を設立したが、これがのちにカリフォルニア統合学研究所へと発展することになる。したがって、フェレールの考えには、オーロビンドの統合哲学もふくまれている。また、最近の大きな展開としては、ケン・ウィルバーが独自のインテグラル思想を提示し、さ

まざまな実践領域をふくむ「インテグラル・ライフ・プラクティス」を提唱して影響力をつよめている。

参与的 (participatory)

フェレールは、みずからの統合的な立場を「参与的」と呼び、実践と研究における「参与的転回」を呼びかけている。ここでいう「参与」とは、何かに参加するというような外的な意味ではなく、個人の内的な活動や経験のなかに、人間を構成するすべての次元が等しく参与するということを意味している。今日にいたるまで、いわゆる認知中心主義が研究や教育のなかで支配的な位置にあるが、これはマインド（精神、思考、分析的理性、合理性）という特定の次元が全体を管理し方向づけるものであり、それゆえ断片的で、ヒエラルキー的で、さらには男性的なアプローチである。これに対して、参与的なアプローチでは、身体、生命力、ハート、マインド、意識といった多次元性が認められ、それらが等価値的、等根源的にプラクティスのなかに組み入れられ、共創造的 (cocreative) に「統合的な成長」に参加することになる。これらの次元を活性化し、統合する具体的な方法として「相互的身体瞑想」と呼ばれるものがある。

トランスフォーマティブ (transformative)

「トランスフォーマティブ」という言葉も、近年、教育や心理療法のなかでしばしば用いられる。たとえば、最先端の教育動向のひとつとして「トランスフォーマティブ・エデュケーション」や「トランスフォーマティブ・ラーニング」ということが語られている。「トランスフォーマティブ」はさまざまな意味で用いられているが、基本的には個人の内的体制の根底的で全体的な変化を意味している。ただし、批判的教育学とも関連のある「トランスフォーマティブ・ラーニング」の諸動向のなかでは、個人の変容だけでなく社会変容も大きなテーマとしてとりあげられる。インテグラルな観点から言うところ、これは、人間のあらゆる次元が参与し、より統合性を高めていくような変容のプロセスを意味している。

身体化 (embodiment)

フェレールの参与的アプローチのなかで重要な位置を占めているのが、身体性の回復ということである。従来のマインド中心の価値観のなかで、身体や生命(およびセクシュアリティ)の次元はつよく抑圧されてきたのであり、また今日のスピリチュアリティへの関心の高まりのなかにあっても、これらの次元はスピリチュアリティとは関係の薄い存在レベルとみなされる傾向がある。これに対して、フェレールは、スピリチュアリティを身体や生命といった基盤に根づかせることの重要性を強調し、超越的なスピリチュアリティではなく、内在的なスピリチュアリティを重視している。

探究 (inquiry)

インテグラル・プラクティスは、探究活動と結びつく。探究には、研究や教育の諸活動がふくまれる。探究をあつかった第2章は、カリフォルニア統合学研究所においてフェレールのコースを受講した学生たちの論考であるが、ここでは、ヘロンの「協同的探究」がとりあげられ、それがホリスティック・インテグレーションと結びつけられている。つまり、ここで探究と呼ばれているのは、主体的で協同的な知の形成プロセスのことであり、それ自体が統合的な成長をともしなうものである。身体をとおして多様な次元が参与するプラクティスを提唱することで、フェレールは、知の様式 (ways of knowing) の多様性と、学問研究の革新的な可能性を提示しているのである。

立命館大学でおこなわれた講義では、時間数が限られていたため、相互的身体瞑想のプラクティスをおこなうことが中心となり、何か特定のテーマを設定して探究のプロセスをすすめるところまでには至らなかった。しかし、それに参加していた人たちにとっては、このプラクティスは非常に刺激的なものとなり、豊かな成果を生み出す可能性をひめたものとなった。そこで本誌では、参加者のうちの何人かに、この講義をとおして経験したことをふりかえってもらい、それを論考やエッセイのかたちで寄稿してもらうことにし、Part IIに収めた。そこには、フェレールの試みに対する各自の反応や探究

の足跡を読みとることができるであろう。なおPart Ⅲでは、インテグラル・アプローチにかかわる独立した二つの論考を収めてある。

最後に、日本ではじめてとなるコースを意欲的におこない、英語論文の翻訳掲載を快諾してくれたフェレル教授に感謝するとともに、本誌に寄稿してくださったみなさんに感謝したい。